

防ぎうる心停止から子どもたちを守るために ～AEDはなぜ学校にあるのか？～

太田 邦雄

金沢大学 医薬保健学研究域 医学系 医学教育学

突然の心停止に対する救命手段として自動対外式除細動器（AED）を用いた心肺蘇生法がある。心原性心停止の救命率が上がる条件として1. 目撃があること、2. 居合わせた人による心肺蘇生が行われること、3. AEDが近くにあること、があるが、これら全てを満たす可能性が最も高い場所の一つが学校である。一方で、学校心臓検診によって、QT延長症候群など致死的な不整脈の可能性のある児童生徒が抽出される。AEDの学校配備は、こういったハイリスクの児童生徒にとって福音である。実際学校現場でのAEDによって社会復帰した報告も少なくない。

しかし、学校管理下における心原性心停止症例の登録研究によれば、心停止の時点で心疾患の診断がついていた例は半数に過ぎず、残りの半数は学校心臓検診でも心疾患の指摘を受けたことがない児童生徒であった。この事は、AEDが必ずしも心疾患を持つ〇〇さんのためのものではなく、すべての児童生徒のためにあることを示している。同時に、心疾患を指摘されたことのない児童生徒の心原性心停止は運動時に発生することが多いから、校庭やプールであっても素早く救命の連鎖が繋げられるよう訓練することが唯一の備えになる。さらに、市民一人一人が心肺蘇生法を習得して突然死を防ごう、そのために子どものうちから学校で心肺蘇生法を学ぼうと国内外で提唱され、AEDの使い方も授業で学ぶようになった。消防とも連携し、地震・火事の避難訓練と同じように学校救急シミュレーションを行なっている地域もある。

朝元気に「行って来ます」と出かけていった後ろ姿がわが子の最期の姿になることほど残酷なことはないかも知れない。学校のAEDは心停止に対する備えであり、心臓検診をはじめとした健康と予防を学ぶきっかけであり、子どもたちが自分自身と命の大切さを考える教材であり、何があっても子どもたちの命は守るという私たち大人の、社会全体の決意の象徴である。そのような社会に育まれるからこそ、子どもたちはそこにいるだけで守られるに値する個人であることを実感し、そうであれば大きくなってそんな社会の一員となることに夢と希望を抱いてくれるかも知れない。その時はじめて子どもたちが心肺蘇生を学ぶ意味が生じる。子どもたちの命は断固として守るという覚悟と行動を、私たち大人と社会に問うために、そして子どもたちに伝えるために、AEDは学校にある。